

第18回演奏会

名古屋アマデウス室内管弦楽団



2026

4
/ 5 (日)

指揮 中村暢宏

ハイドン 交響曲第96番「奇蹟」 Hob.I:96
モーツァルト 交響曲第36番「リンツ」 K.425
モーツァルト 歌劇「羊飼いの王様」序曲 K.208

ザコンサートホール 名古屋・伏見・電気文化会館

【チケット購入】

愛知芸術文化センタープレイガイド TEL:052-972-0430
当日券販売 13:00

開場 13:15

開演 14:00

料金 ¥1,000(全席自由)

【最新情報・チケット予約・お問い合わせ】
楽団HP <https://ngoamadeus.web.fc2.com/>
右側のQRコードからもご覧いただけます
Mail: info.amadeus@ymail.ne.jp
※就学前のお子さまのご入場はご遠慮ください



PROGRAM

ハイドン 交響曲第96番「奇蹟」 Hob.I:96

ハイドンのロンドン交響曲群（第93番から第104番）の一つで、1791年に作曲されました。明るく優雅な曲調が特徴で、第一楽章の生き生きとしたアレグロ、第二楽章の穏やかなアンダンテ、そして第三楽章の陽気なメヌエットと、ハイドンの古典派音楽の完成された様式美が随所に感じられます。終楽章のフィナーレは快活なロンド形式で、華やかさに満ちた締めくくりとなっています。

この曲の副題「奇蹟」には、有名なエピソードがあります。観客がハイドンをよく見ようとステージ近くまで押し寄せホール中央に空席ができたため、会場のシャンデリアが天井から落下したにもかかわらず誰も怪我をしませんでした。近年ではこのエピソードは別の曲（交響曲第102番）の初演時のものだったという説が有力視されています。

モーツァルト 交響曲第36番「リンツ」 K.425

モーツァルトの交響曲第36番「リンツ」（K.425）は、1783年にわずか4日間という驚異的な速さで作曲された傑作です。ウィーンから故郷ザルツブルクへ帰る途中、立ち寄ったオーストリアの都市リンツで、現地のトゥーン伯爵の邸宅での演奏会のために急遽書かれました。このため「リンツ」という愛称で呼ばれています。この曲は、モーツァルトの交響曲では初めて、荘厳なアダージョの序奏を持つのが大きな特徴です。この序奏は、ハイドンの影響を受けたものとされています。続く主部では、明快で躍動感あふれる音楽が展開され、第2楽章では優雅で抒情的な旋律が歌われます。第3楽章のメヌエットは、当時流行していた宮廷舞曲の様式を踏襲しつつ、堂々とした風格を漂わせています。そして、終楽章はオペラのフィナーレを思わせるような、軽快で華やかな楽想で締めくくられます。全体を通して、円熟期のモーツァルトらしい洗練された様式美と、豊かな情感が感じられる作品です。

モーツァルト 歌劇「羊飼いの王様」 K.208 序曲

モーツァルトの歌劇「羊飼いの王様」（K.208）は、1775年にザルツブルクを訪問したオーストリア皇太子マクシミリアン大公を迎えるための祝祭劇として、約一か月で作曲されました。この劇的セレナータは、詩人ピエトロ・メタスタージオの台本に基づいており、王家の血を引く若者アミンタが、羊飼いとしてひっそり暮らす中で真の王位を継承する物語です。ハ長調のソナタ形式で書かれた序曲は、この祝祭的な雰囲気凝縮した、単一楽章の簡潔かつ華やかな作品です。モーツァルトの初期の成熟した音楽様式が感じられ、オペラ本編へと聴衆をスムーズに誘う役割を果たしています。この序曲に続いて、アリアや重唱が織りなす牧歌的で清らかな音楽が展開されます。物語のテーマである「美德と愛の勝利」を表現するかのよう、登場人物たちの心情が繊細に描き出されています。

PROFILES



指揮・音楽監督
中村 暢宏

1973年東京都生まれ。96年愛知県立芸術大学ヴィオラ専攻卒業。08年まで中部フィルトップヴィオラ奏者。2000年から指揮活動を開始し、セントラル愛知交響楽団を始め、県内外の多くの楽団を指揮。12年にはブルガリア国立プロヴディフ・フィルハーモニー交響楽団の定期公演に客演。アマチュアでは当楽団のほか、プランタン管弦楽団、楯山フィルハーモニー等でもタクトを振る。

名古屋アマデウス室内管弦楽団



2008年1月設立のアマチュア楽団。大編成のオーケストラでは比較的演奏機会の少ないモーツァルトやハイドンの楽曲を中心に演奏活動を行う。

会場のご案内

ザコンサートホール

名古屋・伏見・電気文化会館

東山線・鶴舞線「伏見」駅 4番出口より東へ徒歩2分

〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄二丁目2番5号

